

タイ人日本語学習者の受身の習得

サウエットアイヤラム テーウィット

キーワード 言語形式と機能のマッピング、タイ人日本語学習者、受身、被害の気持ちの表示、前後の文の視点の統一

要旨

本稿では、「言語形式と機能のマッピング」¹という角度から、タイ人日本語学習者（以下、JFL）²の上位群と下位群における受身の習得に関する問題へのアプローチとして「被害の気持ちの表示」と「前後の文の視点の統一」という受身の機能に注目し、文法性判断テストとオーラルナレーションと事後調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。(1)「被害の気持ちの表示」の機能と「前後の文の視点の統一」の機能の双方について、形式と機能を適切に組み合わせる能力は学習者の全体的な熟達度が上がるにつれて発達している。(2)但し、受身の形式と「被害の気持ちの表示」の機能を適切に組み合わせる能力は熟達度が上がるにつれて発達し、日本語母語話者（以下、JNS）³との差が見られなくなったが、「前後の文の視点の統一」の機能を適切に組み合わせる能力はまだ十分に発達しておらず、JNSとの差が見られた。その第一の原因として、母語の影響が考えられる。事後調査による被験者の内省などからこれらが示唆されている。

1. これまでの研究とリサーチクエスチョン

外国人日本語学習者にとって、日本語の受身の習得は困難な項目の一つである。初級のみならず、中上級レベルであっても受身がまだ習得できていないという結果を報告した研究がある。田中（1997）、田中（1999a）、田中（1999b）、田中（2004）は語彙指定形式の文生成テスト、田中（1999c）はKYコーパス⁴を材料にOPIに現れたヴォイスの生産順序を調査した。その結果、「直接受身 > 持ち主受身」の習得順序が認められた。複数の母国語を持つ学習者を

対象とした調査であるため、この生成順序は母語に関係がないと結論付けている。また、動詞の形を「受身」にしたものの、動作主を表す「二格」の代わりに「ガ」や「ハ」を使用する「第一名詞ストラテジー」が見られたと述べている。Watabe et. al. (1991) は、英語を母語とする第二言語としての学習者（以下、J S L）⁵、J N S と英語母語話者に2つの作文を書かせた。その結果、J N S は自分の不幸な経験を述べる時に受身をよく使用したのに比べ、J S L はニュースの記事を書く時に、受身をよく使用していた。これは英語母語話者がニュースの記事文面上では受身を多く使用するという結果と一致している。このことから、学習者は受身の形式を習得しているが、母語の影響を受けるので、習得が不完全となると結論付けている。

しかし、田中 (1999c) を除くすべての研究が筆記テストか作文によって調査したものである。筆記テストや作文の結果だけでは実際の場面で本当に受身を使用できるのか判断が難しい。一方、田中 (1999c) は自然な発話から収集した O P I データを使用しているが、学習者の発話に受身が観察されていないという理由だけで、まだ習得されていない結論付けることはできない。従来の研究では、学習者が受身を習得しているにもかかわらず特定の環境によっては使用しないのか、習得していないから使用することができないのか、使用する文脈がないために使用しないのか判断できない。また、J N S が必ずその場合に受身を使用するのかどうか、調査に基づき確認されていない。さらに、殆どの先行研究は日本に滞在し、日本語を学習する被験者を対象としているが、母国で日本語を学習している人を対象に調査した研究がまだ少ない。

これらの問題点を踏まえ、本調査はタイで日本語を学習している人を対象に、理解を調査するための文法性判断テストと、産出を調査するためのオーラルナレーションを併用し、事後調査で被験者の受身使用についての彼らの判断基準、つまり中間言語の実態を確認するという手法をとった。中間言語の形成に影響を及ぼす要素として「言語転移」がある (Selinker, 1972)。母語の言語構造と対象言語の相違が言語習得の速度を促進したり（「正の転移」）、遅らせたり（「負の転移」）する。これらの現象が受身使用の習得状況にもあてはまるかどうかを検証していく。

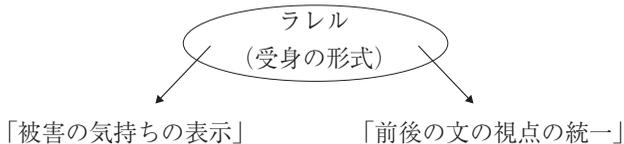
本調査におけるリサーチクエスションは以下の通りである。

- I. 熟達度に応じて、J F L の受身の理解が深まるか。
- II. J F L の受身の使用に母語の転移が見られるか。

2. 「言語形式と機能のマッピング」について⁶

本稿が調査した受身の形式「ラレル」には、いくつかの機能が存在している。図1は今回調査対象とした受身の形式「ラレル」の機能である（受身の形式と機能の説明は、次の3.を参照）。

図1 受身の形式と機能の図



上述した受身の機能が談話単位の発話を作成する際に「被害の気持ちの表示」と「前後の文の視点の統一」の役割を果たすため不可欠なものと考えられている。しかし、学習者が産出した言語形式と機能のマッピングが必ずしも目標言語のものと一致するとは限らない。学習者は様々な過程を経て、次第に母語話者と同様に場面に応じて適切に表現できるようになると考えられる。そこで、本調査では、熟達度の異なる学習者に調査を行い、全体的な熟達度が上がるにつれ、「ラレル」の持つ上記の二つの機能をコンテキストに適した形で使い分けできるようになるかを調査した。

3. 日本語とタイ語の受身の形式と機能

本稿で扱う日本語の受身の形式は「ラレル」である。しかし、主格に立つものが動作を受けることを表しているとは言えない場合、「受身の形式」と見なさない（寺村1982）。そして、日本語の受身の機能に関して、本稿は以下の例1と例2のように分類した。

例1 昨夜、すりに財布をとられて、バスに乗れなかった。

例2 さっき、おばあちゃんに道を聞かれて、案内してあげた。

例1のように「被害の気持ちの表示」の場合、受身が使用される。しかし、

表面的には「被害の気持ちの表示」であるが、前後の文の主語を複文のレベルで考察すると、「前後の文の視点の統一」と考えることも可能である。そのため、本稿はこのような機能を「被害の気持ちを表示し、さらに、視点を統一する（以下、被害＋統一）」と定義する。

それに対し、例2のように、「前後の文の視点の統一」を行う場合も、受身が使用される（奥津 1983、田代 1995）。前後の文の視点を統一するために受身の他に、授受表現なども考えられる。しかし、例2のように恩恵を感じていないときでも、受身は使用される。本稿はこのような機能を「前後の文の視点の統一（以下、視点統一）」と定義する。

受身の構文は「直接受身」、「間接受身」と「持ち主受身」に分類することができる。しかし、本稿では(1)直接受身（被害＋統一）、(2)直接受身（視点統一）と(3)持ち主受身（被害＋統一）のみを扱う。間接受身（被害＋統一）と持ち主受身（視点統一）を対象にしない理由は、JNSによるゆれが見られたからである。

一方、タイ語の受身の形式は数多くあり、複雑であるが、本稿ではタイ語学者に一般的に認められたタイ語の受身の形式「thùuk及びdoon」のみを扱う。受身の構文は、「直接受身」と「持ち主受身」に分類することができる（ミンミット1980）。そして、「thùuk及びdoon」を用いた受身の機能は被害の意味を表現する時に使用されるのが一般的である。⁷

4. 分析の枠組み

4-1 被験者

本稿の観点を明らかにするために、JNS60名とJFL63名を対象にした。また、母語の転移が習得を困難にする原因の一つだと考えられるため、タイ語母語話者（以下、TNS）⁸30名が対象となる場合はオーラルナレーションを用いて調査を行った。

文法性判断テストを受けたJNS30名全員が名古屋大学の農学部の一学生で、オーラルナレーションを受けたJNS30名は名古屋大学の大学院生である。専門は様々であるが、日本語を専攻している人を除外した。一方、JFL63名はタイのタマサート大学の三年生と四年生である。被験者の熟達度に応じて、受身の理解が深まるかどうかを調査するため、本稿は「SPOT」⁹を使用し、JFLのレベルを中央値で上位群と下位群に分けることにした。その結果、上位群は30名で、SPOT点数の平均値は52.00であった。下位群は33名

で、S P O T点数平均値は35.97であった。調査期間は2006年2月から5月までである。

4-2 研究方法

理解を調査するための文法性判断テスト（30問で、そのうちダミー問題は13問）と、産出を調査するためのオーラルナレーション（4コマの漫画6つで、そのうち練習は1つと、ダミー問題は2つ）を併用し、調査を行った（本稿末尾の資料1と2参照）。その後、事後調査によって被験者の受身の使用についての判断基準を確認した。本稿では、J N Sによる受身の使用が80%以下の問題を「ゆれ」と定義し、J N Sのゆれが大きく見られた3つの問題を除外した。また、J F Lが記憶に依存することを防ぐために、J F Lが使用した教科書の例文を反映した問題を扱わないことにした。そのため、本稿で扱う文法性判断テストの問題数は8問になった。8問の機能別の内訳は、(1)「被害+統一」2問、(2)「視点統一」2問と(3)「被害」の機能と「統一」の機能を確認する問題（以下、被統確認）¹⁰4問である。

5. 結果と考察

5-1 文法性判断テスト¹¹

リサーチクエスチョン1：熟達度に応じて、J F Lの受身の理解が深まるか。

表1は受身のそれぞれの機能の得点とS P O T得点の平均及び標準偏差を示す。

表1 「被害+統一」の得点とS P O T得点の平均と標準偏差（N=63）

	満点	平均	標準偏差
「被害+統一」	2	1.27	.677
「統一」	2	.921	.789
S P O Tの得点	65	43.60	9.12

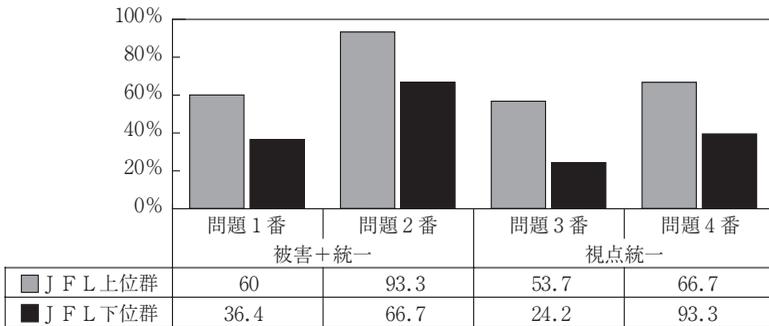
「被害+統一」の得点とS P O T得点の相関関係は、有意であった（ $r(63) = .404, p < .001$ ）。また、「視点統一」の得点とS P O T得点の相関関係は有意であった（ $r(63) = .462, p < .001$ ）。両変数の間には比較的強い相関があると言える。ここで、J F Lを上位群（30人）と下位群（33人）に分け、それぞれ

の機能における問題別の使用率の有意差検定（ χ^2 二乗検定）を行い、JFLの上位群と下位群の数値上の差が実際の傾向的差であるかを検証した。その結果、「被害+統一」の持ち主受身の問題1番を除き、すべての問題において以下の表2のように有意差が見られた。また、図2は文法性判断テストにおける問題別の使用率を示している。

表2 「被害+統一」と「視点統一」の χ^2 二乗検定の結果

	χ^2 二乗検定の結果	問題の構文
「被害+統一」問題1番	$\chi^2(1)=3.520, p=.061$	持ち主受身
問題2番	$\chi^2(1)=6.823, p<.01$	直接受身
「視点統一」問題3番	$\chi^2(1)=6.902, p<.01$	直接受身
問題4番	$\chi^2(1)=4.686, p<.05$	直接受身

図2 文法性判断テストにおける問題別の使用率



同じ「被害+統一」の問題であっても、JFLの上位群と下位群の間で問題1番と問題2番の使用率に χ^2 二乗検定で差が見られた。その原因は構文の影響にあると考えられる。JFLは熟達度が上がるにつれ、問題2番である直接受身を十分理解し、93.3%の使用率を示している。それに対し、上位群になったにもかかわらず、持ち主受身構文はまだ十分理解されておらず、下位群との差が見られなかった。これは、田中（1999a、1999b、2004）が指摘した「『直接受身 > 持ち主受身』の習得順序は母語に関係がない」という結果を支持する結果である。但し、持ち主受身の場合、上位群が下位群より高い使用率を示していることから、上位群になるにつれ、受身の理解が深まることが推測できる。

リサーチクエスチョン2：JFLの受身の使用に母語の転移が見られるか。

1 「被害+統一」と「視点統一」における事後調査

「被害+統一」に関して、JFLの上位群の28人のうちの19人、下位群の24人のうちの23人は「被害の気持ちを表現するため、受身を使用した」と答えているが、残りは「被害の気持ちを表現し、視点を統一するために受身を使用した」と答えている。「被害の気持ちを表現し、視点を統一するために受身を使用した」と答えた上位群と下位群を χ^2 二乗検定で検証したところ、有意差が見られた($\chi^2(1)=6.512, p<.05$)。即ち、熟達度が上がるにつれ、「被害の気持ちを表現し、視点を統一するために受身を使用する」ことを理解するようになっていと考えられる。また、それぞれのグループの「被害の気持ちを表現する」と「被害の気持ちを表現し、視点を統一する」の間に有意差が見られるか検定を行ったところ、JFLの上位群においては有意差が見られなかった($\chi^2(1)=3.571, p=.059$)。一方、下位群においては有意差が見られた($\chi^2(1)=20.17, p<.001$)。下位群の場合は「被害の気持ちを表現する」人数が有意に多いと言える。この結果から、JFLの上位群も下位群も、「被害の気持ち」を表現する時だけに受身を使用することを圧倒的に選択していると考えられる。タイ語では迷惑な気持ちを表現するために受身を使用する(ミンミット 1980)ため、学習者はその影響を受け、容易に受身が選択できたのだと考えられる。

「視点統一」の設問について、事後調査でJFLの両群に受身を使用する理由を確認したところ、上位群の24人中20人、下位群の11人中5人はJNSと同様に「視点を統一するために受身を使用した」と答えている。残りは、「よく分からない」と答えた。「視点を統一するために受身を使用した」と答えた上位群と下位群を χ^2 二乗検定で検証したところ、有意差が見られた($\chi^2(1)=5.30, p<.05$)。そして、それぞれのグループの「視点統一のために受身を使用した」と「よく分からない」の間で検定を行ったところ、上位群においては有意差が見られた($\chi^2(1)=10.67, p<.005$)。一方、下位群においては有意差が見られなかった($\chi^2(1)=.091, p=.763$)。この結果から、下位群は「視点の統一」を考慮して使用することがまだできないが、JFLの熟達度が上がるにつれ、「視点を統一するための受身使用」を理解するようになっていと考えられる。

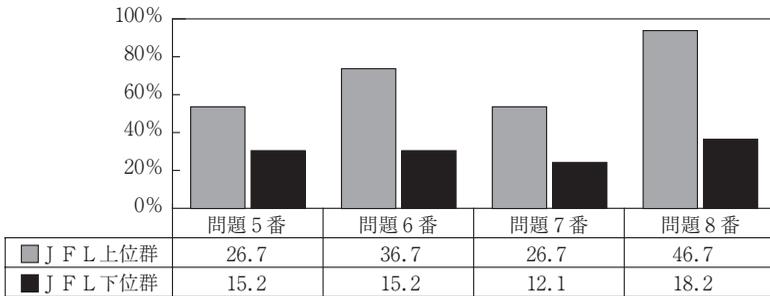
「被害+統一」の点では有意差がないことから、「上位群が『被害の気持ち』を表現する時にだけ受身を使用することを選択する」と述べたが、「視点統一」の結果で明らかになったように、上位群になると、視点を統一するために受身を使用することを理解していると言える。一見、「被害+統一」と「視点統一」の結果が矛盾しているように見えるが、「被害+統一」には二つの機能があるた

め、JFLの上位群はタイ語にもある「被害」の機能にだけ注目し、受身を使用するのであろう。しかし、「視点統一」の設問では一つの機能しか必要でないため、JFLは「被害」という機能との交錯的な影響を受けずに、視点を統一するために受身を使用することができたのだらうと考えられる。

2 「被統確認」における問題別の使用率

図3はそれぞれのグループの間で得られた能動文の問題別の使用率を示す。

図3 「被統確認」における問題別の使用率



「被統確認」の問題として前の文と後の文の主語の視点が合わないが、被害の意味が感じられるものを設定した。JNSは提示した問題から被害を感じても、視点が合わないため、提示された受身から能動文に訂正する傾向が見られる(80%以上)。それに対し、JFLの両群において誤用が数多く観察された。その原因がそれぞれの問題に含まれている「被害」にあることが事後調査で明らかになった。 χ^2 乗検定で有意差を検証したところ、問題8番を除き上位群と下位群の有意差が見られなかった。事後調査と有意差の判定結果から、JFLは上位群であっても、被害を感じた場合、「視点が統一しているかどうか」を考慮せず、受身化する傾向があることが明らかになった。JFLが「視点統一の機能」をまだ習得していないことを示すとも考えられる。しかし、被害の機能がない「統一」においては、上位群と下位群の間に有意差が見られ、上位群において「視点を統一するために受身を使用する」と答えた人数と「受身を使用する理由が答えられない」と答えた人数の間にも有意差が見られた。このように、その文に「視点統一」の必要性だけがある場合、上位群は「視点を統一するために受身を使用する」ことを理解しているが、両方の機能が一緒に現れると、JFLは上位群になっても「被害」にのみ注目してしまい、受身を使用

することを決定すると考えられる。

5.2 オーラルナレーション¹²

リサーチクエスション1：熟達度に応じて、JFLの受身の理解が深まるか。

表3は直接受身構文と持ち主受身構文の「被害＋統一（以下、「直／被害＋統一」と「持／被害＋統一」）」と直接受身構文の「視点統一（以下、「直／視点統一」）」の得点とSPOT得点の平均及び標準偏差を示したものである。

表3 受身の得点とSPOT得点の平均と標準偏差（N=63）

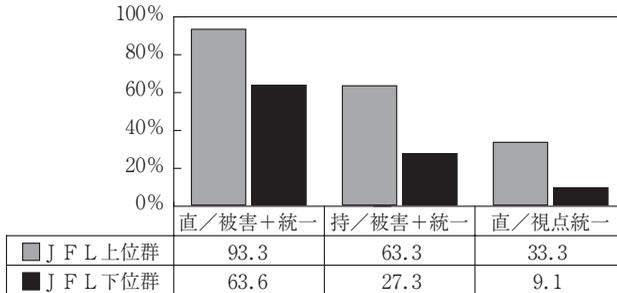
	満点	平均	標準偏差
「直／被害＋統一」	1	.778	.419
「持／被害＋統一」	1	.444	.500
「直／視点統一」	1	.206	.408
SPOTの得点	65	43.60	9.12

「直／被害＋統一」の得点とSPOT得点の相関関係は、有意であった ($r(63) = .306, p < .05$)。両変数の間には低い相関があると言える。「持／被害＋統一」の得点とSPOT得点の相関関係は有意であった ($r(63) = .428, p < .001$)。両変数の間には比較的強い相関があると言える。「直／視点統一」の得点とSPOT得点の相関関係は有意であった ($r(63) = .282, p < .05$)。両変数の間には低い相関があると言える。ここで、JFLの上位群と下位群における問題別の使用率の有意差検定 (χ^2 二乗検定) を行い、上位群と下位群の数値上の差が実際の傾向的差であるかを検証した。その結果、以下の表4のように有意差が見られた。また、図4はその使用率である。

表4 それぞれの受身の χ^2 二乗検定の結果

項目	χ^2 二乗検定の結果
「直／被害＋統一」	$\chi^2(1) = 8.02, p < .01$
「持／被害＋統一」	$\chi^2(1) = 8.28, p < .005$
「直／視点統一」	$\chi^2(1) = 5.64, p < .05$

図4 オーラルナレーションにおける問題別の使用率



この結果から、JFLの熟達度が上がるにつれ、全ての受身構文に関する理解が深まり、受身を使用すべきところで使用することができるようになると言える。但し、「直／被害＋統一」と「持／被害＋統一」では上位群になるにつれ、受身の使用率が高くなるが、「直／視点統一」では上位群であっても、受身の使用率がまだ30%程度であり、JNSの使用率の半分にはまだ達していないことが明らかになった。つまり、JFLは受身の形式を「被害」という機能には十分対応させることができるが、「視点統一」という機能にまだ対応させることができないと考えられる。

誤用については、これまでの先行研究では、日本語学習者の間で、「直接受身を使用する化石化」、「第一名詞ストラテジー」のような誤用を説明する現象が見られるとの指摘がある（田中1999b、田中2004）が、本稿の結果では、「直接受身を使用する化石化」はほとんど見られなかった。誤用の大半は「第一名詞ストラテジー」であった。例えば、例1は下位群、例2は上位群の発話の例である。

例1 きのう わたしは ごじ ごじ お おきました#がっこう#がっこう がっこうに きた がっこうにきたのは ごじはん でした が じゅぎょうはじまりました または しゅくだいを わすれてしまいましたから **せんせいがしかられました**

例2 きのう いえへ かえるとちゅうに **のらいぬ は てを かまられました** そし それで て て がとても いたいです いたいでした えーと あとで ははは けが けがを なおしー ました

「せんせいが(は)しかられた」、「のらいぬはてをかまれた」を使用したことに関して、田中(2004)は第一名詞ストラテジー(first noun strategy)¹³が原因だと述べ、最初の名詞を「が(は)」でマークするというストラテジーが働いていると指摘している。本稿も田中と同じ考えである。JFLは内容が一番捉えやすい行動者を中心にまず文作をはじめ、途中で「被害」を表現する必要性を感じ、その時点から受身に切り替えた可能性が考えられる。しかし、助詞の部分で訂正せず、動詞の部分だけ受身形に訂正したため、ねじれ文を産出してしまったと考えられる。さらに、例2と同様に「かまれた」のように間違えるJFLは上位群にも下位群にも見られた。これは、学習者が「ラレル」を「受身形」の代表と考え、全ての動詞に一般化しようとしたものの一例であると考えられる。

「直/視点統一」において、JNSの93.3%は受身を使用している。しかし、上位群の33.3%、下位群の9.1%しか受身を使用していない。このように、上位群も下位群も視点を統一するために受身を使用することをまだ理解していないと言える。但し、能動文を使用した上位群が23.3%であるのに対し、下位群は54.5%に達した。受身の使用率が少ないことと、能動文が多く使用されることを考えると、下位群は「視点統一」の機能をまだ理解していないと考えられる。以下の例3は下位群が発話した能動文の例である。

例3 したいともだちから やま あ したいともだちのやまだ から
 でんわを かでんわが がけ てきた そして ディズニーラン
 ド さそって わたしは オーケーといたしました

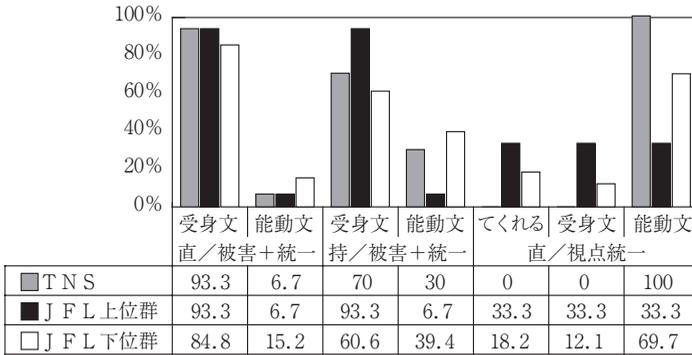
これは、聞き手に誤解を与える可能性が極めて高い例である。例3で使われている「さそって」は、主語を欠いており、相手側である「やまださん」の行動であるか、「わたし」の行動であるか理解しにくい。このように、受身を使用しないこと、さらに主語を省略することによって、聞き手に多くの誤解を与える文章となる。この誤用に関しては、指導を介することで改善できる学習者の特徴であるといえるだろう。

リサーチクエスチョン2：JFLの受身の使用に母語の転移が見られるか。

ここでは、TNSとJFLの受身の使用について考察し、学習者の受身の使用に対する母語の影響について探る。ここで扱うJFLの受身の使用率は、受身を正確に使用したものだけでなく、「活用の間違い」と「助詞の間違い」を含めて計算したものであり、能動文の使用率は、第一名詞ストラテジーである助

詞の間違いも含まれている。¹⁴その結果を以下の図5に示した。

図5 TNSとJFLによる受身の使用率



χ^2 二乗検定法でも有意差を検証した。

表5 TNSとJFLの上位群の場合

項目	χ^2 二乗検定の結果
「直/被害+統一」	$\chi^2(1)=.000, p<.1.00$
「持/被害+統一」	$\chi^2(1)=5.45, p<.05$
「直/視点統一」	$\chi^2(1)=30.00, p<.001$

表6 TNSとJFLの下位群の場合

項目	χ^2 二乗検定の結果
「直/被害+統一」	$\chi^2(1)=1.15, p<.285$
「持/被害+統一」	$\chi^2(1)=.610, p<.435$
「直/視点統一」	$\chi^2(1)=10.81, p<.005$

オーラルナレーションの結果及び事後調査から、TNSは被害を感じている時にのみ受身を使用していることが明らかになった。一方、前後の文の視点を統一するために受身を使用することはタイ語の受身の機能にはないため、「直/視点統一」の問題で、受身を使用せず、TNS全員が能動文を使用したと考えられる(図5を参照)。

一方、TNSとJFLの場合、「直／被害＋統一」において、TNSと上位群、下位群における受身の使用率はどのグループにおいても高かった。そのため、有意差が見られなかったと考えられる。一方、「持／被害＋統一」に関しては、TNSと下位群の間に有意差が見られなかったが、TNSと上位群の間には有意差が見られた。また、「直／視点統一」の場合は、下位群の18.2%は授受表現、12.1%は受身を使用している。上位群になると、母語の構造に影響されずに、受身か授受表現を使用する割合が3分の2まで高まっている。このように、最初の段階では母語からの転移が見られても、レベルが上がるにつれ、その影響が小さくなっている。そして、学習した知識をさらに活用し、JNSと同様に使用しようと試みる傾向が見られる。

6. まとめ

以上、言語形式と機能のマッピング、言語転移という角度から、タイ人日本語学習者の上位群と下位群における受身の習得について検討した。それぞれのリサーチクエスチョン及び結果は以下の通りである。

リサーチクエスチョン1：熟達度に応じて、JFLの受身の理解が深まるか。

受身の理解についても運用についても、「被害の表示」の機能と「前後の文の視点の統一」の機能の双方についてJFLの上位群と下位群の間に使用率の差が見られた。形式と機能を適切に組み合わせる能力も、言語能力全般の熟達度が上がるにつれて発達することが明らかになった。但し、機能によって発達度に差がある。「被害」と「視点の統一」の機能を適切に組み合わせ受身を使用する能力に関しては、JNSとの間に大きな格差が観察された。

リサーチクエスチョン2：JFLの受身の使用に母語の転移が見られるか。

文法判断テストとオーラルナレーションの分析結果および被験者自身の内省の考察から、JFLの受身の使用に母語からの転移が見られることが分かった。母語からの「正の転移」として、JFLは被害を感じる場面では受身が問題なく使用できる。逆に、被害を感じる場面以外では受身使用が見られなかった。これはタイ語において被害以外における受身が存在しないことが大きな要因であり、母語からの「負の転移」として現れている。文法性判断テストで明らかになったように、JFLは、被害を感じている時は「視点が統一しているかどうか」配慮することなく一概に受身構文を使用する傾向がみられた。本調

査で言語能力の上位・下位群の学習者を比較し、上位群の受身使用がJNSの使用により近づいていたことから、熟達進捗と共に「母語の影響」に左右されない中間言語を構築していくという過程が考えられる。

7. 本調査の限界と今後の課題

筆者は、本調査の研究内容において将来見直すべき課題が残されていると考えている。たとえば、文法性判断テストとオーラルナレーションの数が少なかったため、問題の数を増やし実験を再度行う必要があるだろう。さらに、Odlin (1989) やJarvis (2000) の理論を考慮すると、母語の影響があるかどうかより客観的に結論付けるためには、言語構造が異なる二つ以上の言語を母語とする学習者群の比較が必要である。

二点目の課題として、本稿で取り上げた「母語の影響」は、中間言語を構築する上で考慮されるべき要因の一つであり、その他に教科書からのインプット、指導内容、学習過程の訓練の影響、学習者一人一人の学習環境やアイデンティティなどがある (Selinker 1972、田中 1996、1999b、小柳 2004などを参照)。これらの要因を排除せず、さらに包括的な視点から第二言語習得過程を検証していきたいと考えている。

謝辞 本調査に際し、ご協力いただいたタイのタマサート大学日本語学科のスニーラット・ニャンジャローンズック先生をはじめとする先生方、名古屋大学およびタマサート大学の学生の皆様に心より感謝の意を表したい。

注

- 1 form-function mappingという用語を中浜 (2004:89) は「形式と機能のマッピング」と訳している。本稿は中浜 (2004) に従い、この用語を使用する。
- 2 Japanese as a Foreign Languageの略語である。
- 3 Japanese Native Speakerの頭文字をとったものである。
- 4 KYコーパスは、英語・韓国語・中国語話者各30名 (初級5名、中級10名、上級10名、超級5名の4レベルに分けられた) で、計90名の被験者と日本人テストのインタビュー会話からなるデータである。KYコーパスという名称は平成8年~10年度文部省科学研究費補助金・基盤研究「第二言語

としての日本語の習得に関する総合研究」(研究代表者カッケンブッシュ寛子：課題番号08308019)のメンバーである鎌田修と山内博之の頭文字を合わせ、KYコーパスと命名されたことからきている。

- 5 Japanese as a Second Languageの略語である。
- 6 Huebner (1983) を参照。
- 7 Prasithrathisint (1985) が集めた筆記のデータから、現代タイ語には「thùuk」は「悪い意味」と「中立的な意味」の言葉と結び付くことが可能であると言える。但し、違和感を持っているタイ語学者が数多くいる。本稿は、一般的に認められた受身の「被害の機能」のみを扱う。
- 8 Thai Native Speakerの頭文字をとったものである。
- 9 SPOTはSimple Performance-Oriented Testの略語である。自然な速度の音声テープを聴きながら、回答用紙に書かれた同じ文を目で追って行き、文中に設けられた欠落箇所聞こえた音をひらがな一文字で補うというテスト法である。
- 10 これらの問題は迷惑が感じられる文脈になってはいるが、前後の文の主語の視点が統一されていないものである。JNSは、これらの問題の受身のところを能動文に変更している。つまり、JNSは被害を感じていても、視点を統一するために能動文を使用する。
- 11 文法性判断テストは下線部分を判断させるテストとし、その回答の方法は○、×と△の3つである。「よい答えだとは思わないが、普通に使えるようであるため、○をつけた」という意見を防ぐため、△を使用した。しかし、JNSの調査結果を調べたところ、△の意味は×に近かった。従って、本稿では、「×」として換算した。
- 12 本稿のオーラルナレーションは渡邊(1996)に従い、起承転結の展開がある内容を持つ4コマの漫画から構成されたテストである。4コマの絵はすべて過去起こった出来事だと考え、自分が実際にメイン・キャラクターになったつもりで絵のストーリーを話すよう指示した。
- 13 Hakuta(1982) を参照。
- 14 タイ語には動詞の活用及び助詞は存在しないため、受身の動詞の活用や助詞の間違が多い。本調査では、これらの誤用がある産出も受身が使用されていれば受身構文の使用とみなした。第一名詞ストラテジーは、まず行動の主体の立場から物事を能動文で述べようとする学習者のデフォルトの言語産出方略である。本研究のタスクでは、途中で被害の表示の必要性に気付く。多くの被験者が気付いた時点で受身使用へと切り替える「中途切り替え(誤用)」を行った。本調査では、中途切り替えされたものは能動文

として換算した。

参考文献

- 庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門』 スリーエーネットワーク
- 奥津敬一郎 (1983) 「何故受身か?—<視点>からのケース・スタディー」 『国語学』 132集: 65-80
- 小柳かおる (2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』 スリーエーネットワーク
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・分かりにくさの原因をさぐる—」 『日本語教育』 85号: 25-37
- 田中真理 (1996) 「視点・ヴォイスの習得—文生成テストにおける横断的及び縦断的研究—」 『日本語教育』 88号: 104-115
- _____ (1997) 「視点・ヴォイス・複文の習得要因」 『日本語教育』 92号: 107-118
- _____ (1999 a) 「第二言語習得における日本語ヴォイスの習得順序」 『視点・ヴォイスに関する習得研究—学習環境と contextual variability を中心に—』 平成8年度~平成9年度科学研究費補助金 基礎研究(C)(2) 研究成果報告書
- _____ (1999 b) 「文生成テストにおける日本語ヴォイスの習得順序—L1 別分析—」 『視点・ヴォイスに関する習得研究—学習環境と contextual variability を中心に—』 平成8年度~平成9年度科学研究費補助金 基礎研究(C)(2) 研究成果報告書
- _____ (1999 c) 「Oral Proficiency Interviewにおける日本語ヴォイスの習得順序—文生成テストとの比較」 『視点・ヴォイスに関する習得研究—学習環境と contextual variability を中心に—』 平成8年度~平成9年度科学研究費補助金 基礎研究(C)(2) 研究成果報告書
- _____ (2004) 「日本語の『視点』の習得」 南雅彦・浅野真紀子編 『言語学と日本語教育Ⅲ』: 59-76、くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第1巻』 くろしお出版
- 中浜優子 (2004) 「第二言語としての日本語の物語発話における指示対象のトピック管理の発達パターン」 南雅彦・浅野真紀子 (共編) 『言語学と日本語教育Ⅲ』: 77-96、くろしお出版
- ニラタワット・ミンミット (1980) 「受身と使役の表現の日・タイ・英語の対照

- 研究」『日本語教育』40号：121-128
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
- Hakuta, K. (1982). "Interaction Between Particles and Word Order in the Comprehension and Production of the Simple Sentences in Japanese Children". *Developmental Psychology*, 18:62-76.
- Huebner, T. (1983). *A longitudinal analysis of the acquisition of English*. Ann Arbor : Karoma
- Jarvis, S. (2000). "Methodological Rigor in the Study of Transfer :Identifying L 1 Influence in the Interlanguage Lexicon". *Language Learning*, 50(2):245-309.
- Klein, W. (1990). "A theory of language acquisition is not easy". *Studies in Second Language Acquisition*, 12:219-231.
- Odlin, T. (1989). *Language Transfer—Cross-linguistic influence in language learning* — Cambridge University press.
- Prasithrathisint, A. (1985). *Change in the passive constructions in written thai during the Bangkok period*. Ph.D. dissertation. University of Hawaii.
- Rutherford, W. E. (1983). "Language Typology and language transfer". In S.M. Gass & L. Selinker,(Ed.) *Language transfer in language learning* (pp.358-370). Rowley,MA:Newbury House.
- _____. (1984). "Description and explanation in interlanguage syntax : state of the art". *Language Learning*, 34:127-155.
- Selinker, L. (1972). "Interlanguage". *International Review of Applied Linguistics*, 10:209-231
- Tomlin, R. (1990). "Functionalism in second language acquisition". *Studies in Second Language Acquisition*, 12:155-177.
- Watabe, M., Brown, C., & Ueta, Y. (1991). "Transfer of discourse function : Passives in the writings of ESL and JSL learners". *IRAL*, 29(2):115-134.

資料

資料1：文法性判断テスト

I 「被害+統一」の問題1番

(トムは昨日の出来事をジムに話した)

(1) () トム : 昨夜、すりが財布をとって、バスに乗れなかったよ。

ジム : えっ!じゃ、歩いて帰ったの。

トム : うん。

II 「視点統一」の問題4番

(東京で交通事故にあった子供のニュースについて)

(4) 女性 : その子供は結局どうなったの?

() 男性 : 通りがかりの人に助けられて病院に運んだけど、
一時間後死亡したそうだよ。

女性 : お気の毒に。

III 「被統確認」の問題7番

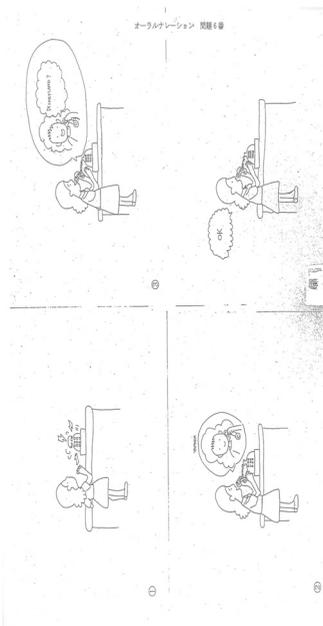
(トムは自分の弟の悪さをマナに話す)

(7) () トム : 隣の村の子がまた僕の弟にいじめられてたよ。
小さい頃、かわいくて自慢できた弟だったのに。

マナ : たいへんだね。

資料2 : オーラルナレーション

「直/視点統一」の絵



「持/被害+統一」の絵

